

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 高岡市立成美小学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中高一貫教育
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

住所 〒933-0917
富山県高岡市京町1-1

E-mail : eseibis-04@city-takaoka.jp

Website : http://seibi-e.el.tym.ed.jp/

児童生徒数：男子 210 名 女子 157 名 合計 367 名
 児童・生徒の年齢 6歳～12歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

**人・もの・ことに働きかけ、関わり・つながりを大切にする子供の育成を
目指して**
— 成美小学校だからできること —

I 主題設定の理由

東日本大震災以後、将来の日本の未来を背負う子供をどう育てるのかを問われている。小学校教育の目的は、「一人の日本人として一人前に行動できる素地を養う」つまり「自立」であり、「人と手をつなぐことができる素地を養う」つまり「共生」が重要な目的と考える。そこで、本校では、人と手をつなぎ、自分にできることを精一杯行おうとする子供を育てることが、私たち教師の仕事であると考え、子供たちと共に地域に出かけ、地域のひとと直接触れ合う場面を数多く設定してきた。

本校では、豊かな地域環境を生かし、ジュニア福祉活動や花壇作りなど、子供たちが主体的に地域に参画する場を作ってきた。

そして、昨年度より、研究主題を「身近な事象（人、もの、こと）に働きかけ、関わりやつながりを大切にしながら主体的に活動する子供の育成を目指して」とし、E S Dの推進に取り組んでいる。「明日の社会をつくる人間」を育てるために、助け合って取り組む集団活動や地球環境を大切にする活動を工夫している。

研究の視点は、次の3つである。

- ①主体的な学びを生み出すための単元構想の工夫
- ②関わりやつながりを通して、学び合う場の工夫
- ③確かな学びをつくるための評価と指導の工夫

昨年度は、豊かな地域環境を生かして、生活科・総合的な学習の時間を中心に研究を進めた。E S Dの視点で教科間のつながりを見直し、関連付けて指導すると効果的と思われる単元を拾い出し、E S Dカレンダーを作成した。

今年度は、昨年度の成果を生かしながら、生活・総合だけでなく、各教科、道徳、特別活動等からもE S Dの推進を図った。また、E S Dの学びが実践を伴った力として発揮されるよう、主体的に社会に参画していく子供を育てられるように具体的な場面設定を行った。また、発達段階に応じて、児童が「関わり」「つながり」をもつ学習対象の範囲を広げていった。

II 成美小学校E S D年間研修計画

		研 修 内 容	備 考
つ か み 自 分	4月	・E S Dについて共通理解 全体計画作成（黒谷）	
	5月	・昨年度のE S Dカレンダーを基にした活動計画の見直し（～6月末）	
	6月	・E S Dの視点に立った授業提案 （学校訪問）	主に高学年部会
	7月	・1学期の取組 振り返り	
	8月	・E S D推進校に学ぶ（校内研修会） ・現地研修 －歴史学習で未来につなぐ－ ・E S D講座準備開始 －研究報告原稿・パワー	県内推進校 他 市内・県内 準備委員 黒谷 他
	9月	・E S D推進校視察	

つ な ぎ	10月	・学習発表会 E S D パネル展示	各学年 1 枚
	11月	・ E S D 講座 (校内プレ) － 6 年合同実践 －	
	12月	・ 2 日 E S D 講座 1 年仲井級・ 6 年高橋級の授業提案 ・ 2 学期の取組 振り返り ・ 教育実践記録チャレンジ	
ま と め	12月初旬		12月初旬項立
	1 月	・ 研究のまとめ執筆	校内研修との合本
	2 月	(一人一実践)	
2 月末	・ E S D カレンダー作成 (来年度へつなぐ)		

Ⅲ 研究の実際 ～ 12月2日 ESD 講座公開校内研修会から ～

1 年 2 組生活科「かぜさんとあそぼう」

(1) 単元について

学級の子供たちは、生活科の時間を楽しみにしている。1 学期に行った「学校たんけんをしよう」では、「今まで見たことのないものを見付けたい」という思いから、進んで探検に出かけた。「職員室には大きな地球儀があったよ。」「図書室には、かいけつゾロリの本が 20 冊もあった。びっくりしたよ。」など、探検で見つけたものや感じたことをすぐに言葉にして語った。また、探検を繰り返すうちに、用務員さんや配膳員さんに疑問に思ったことを直接インタビューするなど自分から人と関わる姿も見られた。「アサガオを育てよう」では、毎朝欠かさずに水をやり、大切にお世話をした。「ぼくのつるは、クラスで一番長く伸びている」と友達と比べてアサガオの成長を喜んだり、家の人からアサガオの育て方を聞き、朝の会で話したりする子供もいた。

普段の生活においても、道端に咲いている草花を摘んで教室に飾ったり、虫を捕まえて育てたりするなど、身の回りの生き物に関心をもって生活している子供たちである。また、タンポポの花が綿毛に変化したのを見て、「このタンポポ、魔法のタンポポだよ。」と話したり、風を感じて、「わあ、髪の毛、さらさらってなったよ。」とうれしそうにしたりするなど、1 年生らしい感性で感じたことを言葉にできる子供たちである。

このように、身の回りの自然やその変化に興味をもち、感じたことをありのままに表現できる子供たちが、自然と思い切り関わり、自分の願いや思いをもって活動できる単元を行いたいと考えた。

本単元では、身近な自然の一つである「風」に着目する。しかし、風は、目に見えないため、日常生活で意識して関わっている子供は少ない。そこで、朝読書や休み時間に、風が登場する絵本や DVD でイメージをもたせたり、外へ出た時に風に目を向けたりした。そして、単元名「かぜと あそぼう」を提示することで、風と十分に関わって、風の吹く様子を楽しみながら遊ぶことができるようにしたい。遊びを通して、五感を働かせて、風の強弱や温度、物の揺れる様子、聞こえる音、風の心地よさを十分に感じ取りながら、意欲的に風と関わっていく姿を期待した。

(2) 参観者の感想カードから

- ・場の工夫がなされており、子供がのびのびと活動できた。
 - ・1 年生であるのに、友達の発言を「待てる」優しさがある。友達の発言の意図、裏側にある思いを読み取ろうとする姿勢も見られ、これこそ ESD である。
 - ・全体的に優しい雰囲気にもまれ、日頃の学級経営のすばらしさが感じられた。
- ☆掲示物から、様々な願いをもっている子供たちであることが読み取れた。ただ、願い

なのか、方法・工夫なのか精選し整理して掲示すると、子供の活動の視点も明確になると思う。

6年3組社会科「人々の願いを生かす政治～安心できる暮らしを目指して～」

(1) 小單元について

子供たちは、昨年度から、総合的な学習の時間などを通して、あまり意識していなかったふるさと高岡を見つめ直し、自分自身が高岡のためにできることはないかと、高岡市の地域振興に向けた活動に取り組んできた。

今年度も「新幹線開通に向けて、高岡に対する印象がよくなるように、あいさつ運動をしよう」「地場産の米や野菜を全国に広めるために自分たちも農業にチャレンジしよう」など、一人一人が自分の課題をもって活動を進めてきた。

このような子供たちが、さらに公民的資質を養うために、高齢者や障害者、子供など、立場の異なる人々全てにとって住みよいまちづくりを目指した政治、地方公共団体の役割を理解してほしいと考えた。自分たちの生活と政治のつながりや関わりを感じ、「子供市民」として多くの人と手をつなぎ、社会に参画していく子供になってほしいと願った。

昨年度、社会科「くらしを支える情報」で、地域の防災に関係する機関と関わり、その役割について学習した。昨年度の学びを生かすことで、より政治とのつながりを感じやすいと考えた。また、自然災害への万全な備えは、持続可能な社会の発展に不可欠なものである。自分を取り巻く人々、社会、自然などの環境との関係性を理解し、自分の役割を見つめ直してほしいと感じ、教材として防災を取り上げた。

本小單元ではまず、暮らしと政治のつながりを感じることができるよう、身近な暮らしの中の公共施設や耐震工事の写真などを提示し、作られた目的や関わっている人について知る場を設けた。その後、東日本大震災の写真や高岡市のハザードマップ等を提示し、高岡市で同じように災害が起きた場合について考えた。子供たちは、震災の様子や今までの生活経験を振り返り、災害時の様子を思い浮かべたり、そこに関わる人や施設を考えたりした。

その後、「人々の願いを生かす政治～安心できる暮らしを目指して～」と單元名を提示し、高岡を災害から守る組織や人々について調べる追究活動に取り組んだ。

「災害予防」、「復旧の取組」について東日本大震災時の新聞やデータを取り上げたり、地域の人々の話を聞いたりする活動を行った。その中で、子供たちは、地域の人々の願いや国民の願い、計画から実施までの期間や過程、規模や予算などを取り上げて具体的に調べていった。そして、市役所や地方公共団体の災害復旧の施策や援助活動など、支えられている自分に気付き始めた。

本時では、「高岡市は、災害に対して安心なまちなのか」を考えた。子供たちは、市や様々な団体が行ってくれる支援と共に、成美校区に住む多様な人々を想起し、防災意識の低さや、一人暮らしの老人など災害が起こったときに支援を必要とする立場の人について話し合った。今後は、自分たちにできる活動を見付け、活動を進めると考える。

この單元を通して、今まで関係のないものだと感じていた政治に関心をもってほしいと考えた。住民と政治のつながりを理解し、その上で一人の市民として自ら参画していく子供の姿を期待した。

(2) 参観者の感想カードから

- ・授業の終末に、自分から「地域に向けて提案していきたい」という意見が多く聞かれた。
 - ・E S Dカレンダーによって、総合的な学習の時間、教科等の関連がよく分かった。
 - ・子供たちが、成美校区の現状や取組について、自分の言葉で語っていた。体験を重視した授業づくりの成果である。
 - ・本時では、防災組織の割合のグラフ等、資料が適切に提示されていた。
- ☆教室の中に校区地図を掲示し、子供の意識が持続するようにするとよい。
☆単に子供の意見をつないでいくだけでなく、教師の切り返しも必要である。

講演会「成美小学校の実践に学ぶ」

富山大学人間発達科学部 教授 松本 謙一先生

◎ 概要

①成美小学校の取組から

高岡市の小学校で、ユネスコスクール第一号となった。温かい心をもった子供の育成に、全校体制で取り組んでいる。

1年生の実践では、第一発言者M児が緊張して話し出せないというハプニングがあった。しかし、周囲の子供は誰もはやし立てず、待っていた。教師も我慢強く待っていた。あの場面では、周囲の子供に「Mちゃんに質問したい人いる」と投げかけるとよかった、質問できる子供は素敵なお子である。教師は、質問したくなった背景を引き出し、全体に広げていく。実物を見て話し合う場面では、M児の尻を見て、早く自分の尻を飛ばしたいという意欲を引き出すことができた。

6年生の実践では、一人学びを基にした授業が展開されていた。一人学びで満足せず、次の追究へと視点を変えるために話し合いを仕組んでいく。同じ事実を見ても、成美のまちは「安心」と捉える子供と「災害が起きたら一瞬で壊れる」と捉える子供がいる。仲間の見方、考え方に触れ、自分の追究を振り返る場とする。事実解釈の仕方、物差しの置き方などを、本気で追究している仲間から学ぶ場としていく。

②ESDって何？

一言で言うと、儲からない教育である。

私利私欲ではなく、原点は「仲間」である。いろいろな国の人と仲良くできる資質を養う教育である。

最近、指導案に書かれたねらいを達成するための授業が多い。しかし、子供を目の前にしたら、思わぬハプニングが起こることがある。思いがけない反応が返ってくる時がある。その時、教師がどう切り返すのかが重要である。指導案通りに押し通そうとするあまり、子供の思いから離れてしまった授業になってしまう。また、子供が十分に満足していないのに、授業の終末で型どおりの振り返りが行われている。子供は、一体何を振り返ればよいのか。ESDでは、子供が「ぼくだってまんざらじゃない」と思うことができるような素敵なお授業を作っていってほしい。

③こんな職員室に

授業研究は時間がかかる。しかし、それによって、放課後の職員室で、学級の子供の素敵さや持ち味を自慢できるような教師集団であってほしい。子供って素敵だなと思えることが授業研究の基本である。

子供が職員室に質問に来たとき、どのような対応をしているか。質問内容に対する答えだけを伝えるのか。そうではなく、勇気を出して質問に来たことをほめてやる。子供は、質問に答えてもらったことより、自分自身を受け止めてもらったことに安心する。一人一人を大切にしている教師の姿勢は、このような場面にも表れる。

IV 各学年の取組から

【第2学年の実践】

低学年部会では、「なかよし」をテーマに、子供自らが身近な人々と進んで関わる姿を目指して取り組んだ。

2年生は、校区にある「こまどり支援学校」の友達との交流活動を行った。仲間と共に相手意識をもって活動することを通して、人と出会う楽しさや喜びを感じることができた。

生活科「なかよしの輪を広げよう」では、6月にこまどり支援学校で交流活動を実施した。一緒に学校探検をしたり、なかよしタイムの活動をしたりすることで、自然にコミュニケーションを図れるようになり、友達意識も芽生えてきた。身体的な不自由さはあるけれど、こまどり支援学校の友達も、自分たちと同じようにみんな頑張っていることを実感できた。

その後、交流活動を振り返り、体験で得た感動を作文に表した。作文には、障害のある人々について理解するとともに、同じ小学生であり大切な友達なんだという気付



きが見られた。そして、対等な立場に立ったものの見方、考え方ができるようになった。

【第3学年の実践】

中学年部会では、自分たちの住む地域に出かけ、地域を知り、地域で学び、地域の一員としての自覚を深める子どもの姿を目指している。

3年生は、総合的な学習の時間の単元名を「パンフレットに綴る 私が見つけた成美のお宝」とし、地域の中にある当たり前だと思っていた風景や人々との出会いから、新たな価値を見出し、「成美地域のお宝」として心を寄せて関わりを深めた。



子供たちは、地域の「人」との出会いに心を動かされ、地域の方へ憧れをもったり、何度も探検に出かけたりして進んで関わっていった。また、一人一人の「お宝」感について話し合いを重ねることで、地域の人やものに対し、多様なものの見方や考え方が育まれ、地域のよさや温かさ、地域の人々に守られている自分に気づき、地域への愛着をより一層深めた。

取組の成果は、子供一人一人のパンフレットの中に盛り込んだ。

【第4学年の実践】

4年生は、今年度、校区を流れる千保川に目を向け、総合で「千保川未来プロジェクト ～千保川みらいづくり隊～」に取り組んだ。「千保川」を通して地域の人との関わりを深めながら、地域のために自分ができることを考え、実践している。



単元の導入では、川遊びや千保川探検、地域の方に川の歴史や思いを聞く活動を行い、それをきっかけに、千保川の未来のために自分にできることを考え、働きかける時間を十分に確保することで追究を深めた。サケの放流や水質検査、生息する魚調べ、桜並木調べ等の活動を通して、地域の方の思いに触れ、川と共に生きる人々の生き方にも目を向け始めた。

活動の節目に開く「千保川みらい会議」は、友達への心の寄せ方や活動内容を知り、互いに認め合ったり、自信を深めたりする場となった。このような活動を通して、地域により一層愛着をもち、地域の一員である自覚をもち始めている。

千保川は、私たち高岡人にとって「母なる川」である。4年生の子供たちが、千保川を学習対象にして感じたり考えたりしたことは、総合だけでなく、各教科の学習にも生かされている。12月には、千保川を題材に「いのちの教育」の授業実践も行った。

【第5学年の実践】



高学年部会では、自分たちの住む高岡市の現状や歴史から、自ら課題を見付け活動に取り組む子供の姿を目指した。



5年生は、「成美・高岡の伝統 受け継ぎ隊！」をテーマに、「ものづくり・デザイン科」と総合的な学習の時間を関連させながら実践を積み重ねている。ものづくり・デザイン科に教科として取り組んでいるのは全国で本市だけであり、最大の特徴は、教員だけでなく、優れた技術をもった職人さん達が学校に出向いたり、児童生徒が工房を訪れたりして、直接指導を受けることである。

5年生の子供たちは、ものづくり・デザイン科で、高岡市の伝統工芸を直接見たり触れたりする体験や、その技術を受け継ぐ人々に直接会って話を聞く場をもったことで、伝統を受け継ぐすばらしさを感じ取っていた。そんな子供たちが、ひたむきに伝

統を守り続ける地域の人々との交流を大切にしながら、高岡の歴史や伝統についての理解を深め、未来に受け継ごうと活動している。

高岡漆器、高岡銅器といった伝統工芸を受け継ぐ人、また、旧町名の復活や獅子舞の保存等に尽力する人を学習対象とし、ふるさとの過去・現在・未来を自分たちの手でつないでいこうとしている。

5年生の子供たちは、歴史都市「高岡」、ものづくりのまち「高岡」に誇りをもっている。それが、ものづくり・デザイン科で一人一人が製作した作品にも表現されている。

V まとめ

本校では、子供一人一人の視点を大切にした学習活動を展開してきた。

そのため、

- ・子供同士の関わりが生まれる学習環境のを工夫
- ・多様な人との出会い
- ・地域の人・こと・ものに直接関わる場の設定

などを行ってきた。その積み重ねが、児童に学級、学校、社会への参画意識をもたせ、自ら働きかける子供を育てることにつながったと考える。

これからも、地域を知り、地域で学び、地域のために自分たちにできることを考え発信していく子供、そして、自分だけでなく、友達も、家族も、地域の人も、そして同じ地球に生きる全ての人が幸せになってほしいと考える子供を育てていきたい。

今後は、これまでの取組を地域の方々をはじめ、広く外部に発信して評価していただき、その評価結果を児童の取組に反映させていく。

また、東日本大震災以来、交流を続けている岩手県の広田小学校をはじめ、本校児童の人とのつながり、関わりの輪が一層広がっていくように支援していきたいと考える。

今後も全教育活動をE S Dの視点で捉え直し、教師の意識も児童の意識も「持続可能な社会」づくりに向けていけるよう努めていく。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（）